

## 若年認知症のある人を介護する家族と家族会

### - その出会いのプロセスと役割とは -

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
発達・福祉臨床クラスター  
横山 由希子

#### 1. 研究目的

認知症のある人と共に暮らすということは、その家族に多くの負担を強いることが先行研究によって明らかにされている。なかでも、若年認知症のある人（以下、本人と表記）と若年認知症のある人を介護する家族（以下、家族と表記）は、社会の中に継続的に所属する居場所がなく、家族を含めた全体を支援していくことが求められている。居場所のない家族と本人を支援すべく、全国に若年認知症家族会が組織されているが、数も少なく、家族や専門職らが支援方法を手探りしている現状にある。本人と共に暮らす経験のなかで、家族がどのように家族会と出会い、何を得ているのか。本研究は、家族が家族会に出会うまでに辿るプロセスと家族会の役割を明らかにすることを目的とした。

#### 2. 研究方法

若年認知症支援の会 A 会（以下、A 会と表記）に所属する家族会員 12 名に対して半構造化面接を行った。認知症発症から家族会に出会うまでのプロセスと、A 会への思いの大きく 2 点について尋ね、それぞれ研究 1 と研究 2 とに分けて分析を行った。分析では、研究 1・2 とともに、佐藤(2008,pp.97-104)の帰納的アプローチに基づき、概念カテゴリーを作成した。

#### 3. 結果と考察

研究 1 で、認知症発症から家族会に出会うまで、家族は「現実に直面する」、「葛藤する」、「折り合いをつける」、「前進する」といったプロセスを辿ることが明らかとなった。また、過去の判断や対応に対する「罪悪感／肯定感」といった、いわゆる相反する感情が家族の心の中に存在することが示唆された。研究 2 で、家族にとって A 会が果たす役割として、「居場所の創出」、「社会参加・自己実現の機会の提供」、「わかちあい・ひとりだち・ときはなち(岡,1999)」が見出された。

家族の前進して行くプロセスを後押しするために家族会が重要な役割を果たしていることが示唆された。家族は、家族会で精神的負担の軽減をはかり、誰かから必要とされる経験を通して自分の尊厳を取り戻し、前進するエネルギーをチャージしていると考えることが出来る。

#### 引用参考文献

- 岡知史(1999). わかちあいから・ひとりだちのために・ときはなちのために『セルフヘルプグループ わかちあい・ひとりだち・ときはなち』 星和書店 pp.1-88
- 佐藤郁哉(2008). 第 7 章 コーディングをおこなう『質的データ分析法 原理・方法・実践』新曜社 pp.97-104